



『トクシマ・アンツアイガー』

第2巻

第12号

徳島 1915年12月12日

大規模な英仏の攻撃について

我々は今日やっと読者に西部戦線における先ごろの大規模攻撃に関する、非常に興味深い戦闘報告をすることが出来る。野戦郵便の体裁をとっているが、それはエルドニス上級書記官殿が親切にも掲載を認めて下さったものである。その郵便は予備少尉としてアルゴネン山脈にあり、そして今次の戦闘の際に負傷した上級書記官殿の弟さんから送られたものである。

1915年9月30日衛戍病院にて

やっと再びドイツの地に戻り、便りを書くことが出来た。フランス並びにイギリス軍の大規模な秋季攻撃が起こったのだ。9月22日朝5時、フランス軍の全大砲が轟き始めた。正午頃、15センチ、22センチ及び28センチの重砲が加わった。前二者は曲射砲で、残りは平射鉄道砲だった。

それは大騒ぎだった。僕はそれまで妨害将校（鉄条網の敷設）の任務を担い、今は観測将校を命じられたので、その光景を上からすっきり見ることが出来た。僕の持ち場は森の外れの唐檜だった。僕たちの陣地は西の方に続いて、更にずっと遠くシャンパーニュ陣地の一部が見渡せた。重砲はほとんど全てがコンクリートで固められた観測場と機関銃台を狙い撃ちした。残ったものはほとんど一つもなかった。小口径の銃火は荒れ狂い、大口径もゆったり来ることはなかった。2時間の間で、僕たちの長さ 500メートルの陣地に落下した重榴弾は 2,000 発だった。最前線の塹壕は最早見分けがつかず、瓦礫の山また山だった。暗くなると重砲はその砲火を和らげ、軽野戦砲は一晩中火を吹いた。三グループのフランス軍最強口径の榴弾筒が僕たちの陣地を昼夜榴弾で覆った。今回はその間に不発弾は全然なかった。僕たちの重砲の砲火は弱かった。それは榴弾筒を時たま沈黙させるだけだった。一度榴弾庫が燃え上がった。その夜僕は隣の大隊へ出かけた。そこへ行く道はとある湖沿いだった。僕は湖と堤防の間の内側を行かざるをえなかった。というのも湖沿いの道は砲兵隊の砲火の真下だったから。僕はなんとか切り抜けた。その前に 3 名がそこで負傷していた。でも僕たち、つまり僕の伝令と僕は大急ぎで逃げ出した。陣地の状況は良いようには思えなかった。でもここは固く乾いた石灰質の地面で、僕たちの畑地よりはかなり抵抗が効く。半分以上は完全に無傷だった。多分僕にとっての仕事があったが、一人で塹壕から妨害の仕事に行くという僕なりの試みは、既にかなり的確な砲撃で封じられた。僕はたとえ身体は汚れても、無事に切り抜けた幸運について話すことが出来る。二日目も同じ感じだった。28 センチ砲が後方の連絡網、駅や道やその他彼らにとってなご望ましいと思われるものに砲弾を撒き散らした。フランス軍の 9 個の係留気球が浮かんでいるのが遠くに見え、その前を一団の飛行機が警護していた。二日目の夜、もう一度隣の大隊へ赴いたが、連絡網は地雷と重砲の砲火の下にあったので、突き抜けて行くのは自殺行為だっただろう。僕は連隊作戦部全体の妨害任務をもっていたので、この作戦のための指示を電話でしな

ければならなかったけれど、口いっぱい泥だらけになって退却した。ある工兵少尉も一緒に行こうとしていたけど、顔に擦過傷を受けて戻ってきた。三日目の夜も過ぎた。

三日目の9月24日の昼、突然フランス軍一個小隊が歩兵R87連隊の前に現れて攻撃を仕掛けてこようとした。その小隊は僕たちの中隊の一つによる側面攻撃を受けると同時に、僕たちの榴弾砲と臼砲がフランスの塹壕と泥の「ヴィル・シュル・トゥルブ村」に砲火を浴びせると、すぐにみんなまた消え失せた。

25日、終に様相は一変した。午前8時半に僕たちの森の縁陣地の塹壕は大砲の砲弾に見舞われた。風向きは南東で、あらゆる物を僕たちの後方の連絡網へと運んでいった。僕たちの監視は幸いにも更に続行できた。砲弾は広範囲に煙を撒き散らした以外には、何の効き目もなかった。煙も確たる意図があったようには見えなかった。10時になってから僕たちは右方向の近くの大隊への攻撃を目撃し、ただちに伝令が走り去り、更に10分後僕は僕たちに向けられた攻撃を確認した。攻撃は陣地全体ではなくて、中央部までを目標にしていた。更に森の方や更にその先のアルゴン山脈までは平穏だった。僕たちの鉄条網の前ではフランス兵たちの前進が止まり、そしてこの瞬間に21センチ榴弾が群れの中へシュッと投げ込まれた。ものすごい穴がいくつも出来た。ともかく攻撃する敵の一部が—それは1915年組の410大隊だった—僕たちの陣地に来て、粉碎した一部に住みついた。歩兵部隊が前進すると、機関銃が森の縁を発砲し始めた。果たして僕は左のふくらはぎに一発食らってしまった。けれどもさし当たっての攻撃の成果が見渡せるまで留まり、僕たちの側に対して起こったことを知った。それから僕は木から降りた。森の中で全員に動員がかかったその直後、再び部署に就き、二度目の銃撃を今度は左の大腿部に受けた。それでもう充分で、僕は包帯をしてもらった。それは正午のことだった。僕たちは陣地を維持した。フランス兵たちには決して突破することは出来ないだろう。ザールブリュッケンのカトリック系の病院に運ばれた。その

内にリンブルクへ回してもらうことを僕は考えている。治療は正常に進んでいる。銃弾の一つは脚の中に残るそうだ。

この攻撃は多分冬季の進軍に終わりを告げることになるだろう。

これが苦しみの最後であれば満足なのだけれど。

日本の宗教（2）

仏教にも、いかなる本来の平信徒共同体というものがない。その最高目標は修道僧たちにおいてのみ達せられるのである。しかし修道僧たちは生活の糧を寛大な喜捨と寄付とに頼っていたので、彼らはまた当然ながら自分たちの生計を維持することが出来る、仏陀を尊敬する平信徒の可能な限りに大きな輪をこしらえることに関心をもっていた。この平信徒たちに修道僧や僧侶は教えを伝え、聖なる書物を説いている。彼らのために厳かな祭礼が生み出され、ありとあらゆる祭礼行事が受け容れられ、その中で表面的には執着心のある人々は宗教の本質を見たいと思っている。仏教にはまばゆい行列、豊かに装飾された僧侶の衣装、薫香、バラの花冠、お守り、巡礼、贖宥、聖人と聖遺物崇拜がある。ともかく平信徒にとってもある種の戒律が通用し、しかも次のような戒律である。「汝人を殺すなかれ」、「汝盗むなかれ」、「汝淫らに生きるなかれ」、「汝嘘をつくなかれ」、「汝酔うほどに酒を飲むなかれ」。

平信徒の中に確固とした支持をもっていなかった仏教は、まもなくその故国では再び強力になりつつあったバラモン教によって排除された。しかし門弟たちはセイロン、ビルマ及び中国で新しい支持者を獲得することが出来た。仏教は中国から朝鮮への道を見出し、そこから日本に導入された。朝鮮の統治者が日本の宮廷へ送った使節とともに、仏教の僧侶と修道僧は最初の寺院と修道院を設立した（紀元 522 年）。この新しい信仰は始め徐々に、しかも知識層にしか広まらなかった。しかし仏教と根源的な神道との

巧みな融和は、まもなくこの新しい教えを一般にまで広めていった。神々は仏陀の新たなる顕現の形として説明され、そして神道の神々があっさりと引き継がれた。ニルヴァーナの代わりに、善と悪のための天国と地獄の信仰が作り出された。一般民衆へその印象を作り出す盛大な儀式も欠くことはなかった。民衆はともかくどのみち神道と仏教の区別を認識することはできない。仏教は僧侶たちの熱心な改宗への働きかけと、土地に合った形式のお陰で急速に広まった。多くの神道寺院が仏教寺院へと衣替えし、至る所に僧院が設立されて、そこには豊かな寄付金が割り当てられた。僧院は徐々に大きな政治的な勢力ともなり、そのために信長は 1571 年、僧院に対して徹底的な破壊を企てる必要性を感じた。神道はかなり抑圧されたにも拘らず日本は、宗教戦争の恐怖から免れた。というのは宗教が政治から遠ざけられ、本来の国家宗教が存在しなかったからである。明治維新とともに初めて、元来の神道を国家宗教に高める努力が功を奏した。その時、かつては神道寺院だった夥しい数の仏教寺院が外見上の装飾を奪われて、再び神道寺院に模様替えさせられた。

つづく

カバレット「ミモザ」

「ねえ、カバレットの夕べはどうでした？」

「僕はついてなかった！そこには居なかったのです！」

「なんですって?!居なかったって?一体どうしてそんなことに？」

「僕は前もって最新のトクシマ・アンツアイガーを読むつもりだった。

でもそれを広げて眠り込んでしまい、目が覚めたら

すべてが終わっていた！」

「それは本当についてないね！君は見逃しが多すぎるよ！」

「確かに！まあともかく、どんな様子だったか聞かせてくれないか？」

「いいだろう！そこに居なかったのはもちろん君一人だった。まあ、席はほとんど見つからなかっただろうけど。というのも満員で、立錫の余地もなかったから。」

「それで他には？」

「入り口で赤いモールを付けた係りからプログラムが渡された。無料さ！チップなどは決して受け取らない！」

「なんだって！」

「それからすらりとした背の高い、優雅な身なりの紳士に出迎えられたが、その者は大使館のアッタシェーといった振舞いで席を教えてくれた。— それだけでもうすっかり驚いていると、この夕べの主催責任者たちであるカバレットのお歴々が次々に登場した時は、すぐに圧倒された。」

「どうして圧倒されたの？」

「彼らの姿のエレガントさによってさ！例えば、音楽担当の方々は、目を引くばかりの粋な被り物をしている。ところで音楽ときたら！全く新たな編成だ！5人だけだ。でもその彼らがどんな風に何を演奏したかって？！抜群にして優美；本物の、耳に心地よいカバレット音楽。取り分けワルツは…」

「もう少し手短にお願いします。僕はまだトクシマ・アンツァイガーを最後まで読まなければならないのです！」

「はい、はい、それでは出演者たちについて話します！」

「そこに居たのはたとえば、口ひげをかすかに染め、頭髪はエレガントに薄い司会者のヨズア・ホルトキャンプ氏、（口の悪い人は借り物という）外套を着た様は、第一級の紳士服仕立屋のカタログから飛び出したように見えるグリュネヴェラー氏。イギリスの民族衣装を着たハインツェル氏、まだ塹壕の泥にまみれたズボンと長靴でホールにやって来た感の国民軍兵士シュルツ氏、そして取り分け我らが男

声四重合唱団！つまりこの男声四重合唱団！彼らが何を歌ったか分かります？まあ聞いて下さい！サラダ！サラダ！サラダ！サラダ！サラダ！」

「またしても脱線しましたよ！あなたの話はすべて実に興味深いです！でも触れているのは男性ばかりです！ドイツのカバレットに、先ずもって正真正銘刺激を与えるのはやはり女性です！男性だけしか登場しないカバレットはやはり…」

「よろしいでしょうか、君！カバレット「ミモザ」には女性が一人いますよ！！もちろん！どんな女性かって！実に魅力的です！フリッツィ嬢です！シャンペンのような歌とデュエットダンスは見ものだったのに！君は逃してしまったことをまだ全然分かっていませんよ！」

「そうでしたか！それなら僕はもちろん全部撤回します。でもこの収容所に女性がいることが許されているとは考えもしなかった。しかもカバレットの女性とは！そんな軽薄で、墮落した女が！」

「軽薄？墮落した？フリッツィ嬢は全然そうではない。きっぱり断言できるけれど、彼女は全くもって内に優れた芽を持っている！」

「君はカバレットをただただかばいたいと思っているように見えるね！」

「そうじゃないけれど君の言うのももっともだ！僕は講演については確かに全く話していなかった。たとえばフランツ国王の話を知っている？」

「残念だけれどもう時間がない。」

「あるいは、コン、コンスタン、スタンチン、コン スタン チ ノーペルの歌…」

「もう分かったよ、次の上演には決して遅れたりしてはいけないことが。」

「そうさ、君は二度と都合の悪いときにはトクシマ・アンツアイガーを読まないことだ。」

「用心するよ！お休み！」

「それじゃ！」

第 28 回徳島オーケストラ
第 2 回シンフォニーコンサート
1915 年 12 月 12 日

演奏曲目

- 1) 交響曲第 6 番¹ ヨーゼフ・ハイドン
a) アダージオ・カンタービレ b) ヴィヴァーチェ・アッサイ
c) アンダンテ d) メヌエツト
e) アレグロ・ディ・モルト
- 2) エレジー（作品 10 番第 3） S.W. エルンスト
L. シュポーアの序奏付き
ハーモニウム伴奏によるヴァイオリンソロ
- 3) オペラ『フィガロの結婚』序曲 W.A. モーツァルト

シンフォニーの夕べ

かつて器楽はほとんど専ら伴奏役であった。それは出だしを支え、そして花盛りの枝でダンスのリズムに絡みついた。その頃は比較的短い音楽作品しかなく、そのどれもがそれ自体、まさしく歌あるいはダンスが要求した通りの一つの調子、一つのリズムしかなかった。しかしひとたび楽器が独立して聞かせることを楽しむ程に完成の域に達すると、やがてそうした曲はあまりにも短すぎた。もっと大きなグループ演奏が出来るように、ずっと沢山のダンスが続くようになった。こうして長いこと我々の父祖の最大の愛情に応えることが出来る組曲が成立した。もちろん選ばれるのは実に様々な種類のダンスである。というのも転換によって初めて全体が美しくなり、対象の対比と最終的な比較によって、部分は一つの芸術的な統一へ

1 これは通常、第 94 番とされる曲で「太鼓連打」という愛称がある。

成長したのである。そしてダンスが充分には転換しない場合、ともかくそこに歌が挿入された。これらの部分がもはや全く本来のダンスから取られたものではない場合でさえも、こうして組曲の全てがダンスの名を持った。サラバンド、アルマンド、ジーク、ブーレ、アリア（歌の一部！）、これらは昔の組曲で再三出くわす名前である。ところで時が経つうちにこれらの作品は更に進化した。オーケストラは大きくなり、より大きな課題に挑戦し、作曲家はますます短い部分から抜け出て、それを大きな、広くかつ深く構想された部門へと紡ぎ、それには最早小さなダンスの名は相応しくなかった。こうして一つの芸術形式、おそらくはそもそも最高の音楽形式が出来上がり、それはシンフォニーの名を持つに至った。シンフォニーはほとんど常に四つの部分（楽章）から成り立っている。すなわち

1. 早い楽章（アレグロ ヴィヴァーチェもしくはその類）
2. ゆっくりした楽章（アダージオ、ラルゴ、もしくはその類）
3. 楽しげな楽章（メヌエットもしくはスケルツォ）
4. とても生き活きた最終楽章（フィナーレ、アレグロ、プレストもしくはその類）

シンフォニーの原形式は、歌から形成されたゆっくりした楽章、及びいまだにダンスの名を持ってさえいて、ここで演奏されることがよくある第3楽章に事実しばしばよく認められる。第1楽章はたいていいまだにゆっくりしたテンポで書かれている導入部を持つ。

さて個々の楽章はそれ自体で完全に独立した作品で、またその形式に従って今日でも多くの場合においてなおそうであるにも関わらず、この独立性はやはり外面的に過ぎない。深い根本思想はシンフォニー全体の下に隠れていて、作品全体によって追求されている。こうしてベートーヴェンはその第九シンフォニー、疑いもなくかつて書かれた最高の作品の第1楽章で、生命の中身と目的を求める深い問いを投げかけている。ファウストのように聞き手はやがて、人類の高みと深みをさ迷い、終には解放的で崇高な解決を最終楽章の圧倒的なものの中で見事に体験するのである。

もちろんそうした深い問題に父なるハイドンはまだ関わってはいなかった。それどころかモーツァルトに至るまで、音楽はまだ「生命の表現」ではなかった。音楽をそこに至るまで高めたのはベートーヴェンが初めてだった。音楽はむしろ「生活の飾り」だった。ハイドンは楽しく祝われるべき祝祭のために音楽を書き、我々にそのための沢山の美しい作品を贈ってくれた。そうした中から我々は交響曲第6番を聴いているのである。第6番に「びっくり」という異名があるのは、ゆっくりした楽章の中のささやかな悪ふざけのせいだ。それはハイドンが何人かの不真面目な聴衆を念頭にしたものだが、それは実際単なる悪ふざけなどではない。というのもそれは全く音楽的であって、作曲の枠内にとどまっているからである。

今日は交響曲の外面的な形式にちょっと少な目のスペースを割いたが、ひょっとして次回ベートーヴェンの交響曲の一つが演奏される時、作曲家が我々に体験させる根本思想と考えを追い求めることが出来るのを期待しておこう。

エレジー（悲歌）の成立について

上流家庭の出である若き有能なヴァイオリニスト H.W. エルンストには、同年の女友達がいる。さる高官である少女の父は二人の友情関係について知り、まだ子どもっぽい段階にある限りはその関係を甘受していた。ところがある日、音楽室にいる若きエルンストと娘の様子を窺っていたとき、今や大人になりかけていた二人の友情関係が、相互の真剣な愛情に成長しているように思われることが、彼に隠しようもなくはっきりする。彼は若きエルンストを傍らに呼び、父親のように心のこもった仕方でご説明する。今後は娘と逢うことを止めてもらわねばならない、今や二人はもはや子どもではない、エルンストは先ずは勉学を全うすること。成熟した男、芸術家となった将来には心から歓迎する、しかしそれまではどんな交際も

止めなければならいと。重い心ではあったが、決然とした勇気をもってエルンストは信頼に沿うことを約束する。

故郷を離れてウィーンとパリで勉強に打ち込んで6年後、エルンストは世界的な名声を得るヴァイオリニストになった。彼の努力の原動力は常にかつての若い女友達であった。たぶん彼は折に触れて親戚から少女のことを聞いていた。しかし彼は約束を忘れずに彼女に一度として手紙を書かなかつたし、彼女からも手紙を貰うことはなかつた。しかし今、世界を征服する完成した芸術家として、彼は終に自分の仕事と努力に王冠を載せようと故郷へと急ぐ。彼が向かう最初の道は恋人の所である。この上なく幸せだった青春の夢の数々の時間を過ごした家の近くで、突然不確かな感情と不安な予感が彼を襲う。しかし彼はそれをなんとか振り払ってその家に入る。物音一つしない静けさに彼はおずおずした足取りで、よく知った懐かしい部屋に踏み入れる。—しかし誰一人出て来ない。—誰一人彼を出迎える者はいない。あれから何年もずっと、彼はまさしくこの瞬間を素晴らしく思い描いてきたのに。そこで彼は居間の扉を開ける—そして金縛りにあつたように彼は敷居の上で立ち止まる：部屋の中央に花を敷き詰められて灯りがともされた棺が置かれ、その棺に横たわるのは—彼の最愛の人。

エルンストは激しい神経衰弱の熱に襲われ、何ヶ月も生死の間をさ迷う；彼は病を克服するが、別人になってしまった。かつて彼の芸術は、愛する女性と結ばれる期待でその養分を見出していたが、今は失われた愛による悲しみが彼の芸術の方向を規定する。

夕方、エルンストの家の前を通る者は、しばしば半分開けられた窓から夕闇へ漏れ出る、憂鬱で激情的なヴァイオリンの音色に足をすくまされた。

この心を打つ、苦しみの響きと失われた愛を、彼は「エレジー」として後世に伝え、偉大な名匠シュポアがその導入部を書いた。

スポーツ

我々のスポーツ愛好者にとって関心のある以下の記事が、ククスハーフェン日報に掲載されている：

「昨日のドイツ戦時砲丸投げ大会ベルリン競技会において、ククスハーフェン海軍スポーツ協会会員である、帝国軍艦「バーデン」のヴァッサーフーアー一等兵曹（かつて膠州海軍砲兵隊第3中隊に所属）が12.87mで圧勝した。」

チェス・コーナー

（駒の略語 K=キング、D=クイーン、L=ビショップ、
S=ナイト、T=ルーク、B=ポーン）

第 67 問の解答

1. Dg6 - g1 任意の手
2. D oder S 詰み

第 68 問の解答

1. Lh3 - g2 e6 -e5
2. Lg2 - h1 Kd6 - e6 (e4)
3. Sf3 - g5 (- e1) 詰み

第 68 問その他の解答

- | | |
|------------------------|----------------------------|
| 1. Kd5 - e4 | 1. Lh3 - g2 e6 -e5 |
| 2. Sf3 - e1 + Ke4 - e5 | 2. e7 - e6 (e5-e4) |
| 3. Se1 - d3 詰み | 3. Sh5 - f6(- f4) ≠ |

第 67 問に正解を送ってきたのはヨーゼフ・ヴェーバーだった。

第 68 問の解答でヨーゼフ・ヴェーバーは、Bg4 を見落としている。

第 69 問

白：Kh7, Dg1, Tf1, h4, La4, Sa5, f5, Bc4.

黒：Ke4, Lb1, b4, Sf4, Be5

2 手詰め

第 70 問

白：Kg2, Dd4, Tb3, La1, Bd3

黒：Ka5, La3, Bb4, b5, b6, b7, a2

3 手詰め

蒸気船「フロリダ」の沈没（1）

補助巡洋艦「アイテル・フリードリヒ皇子」によって撃沈された蒸気船「フロリダ」のある乗客が、『ル・マタン』紙にその冒険を以下のように記している。

「フロリダ」はル・アーヴルを出港して、いくつかの港に寄港してブエノスアイレスに向かっていた。出航の最初の部分ですでに我々は、迷信深い船員が悪い兆候と見なす、ちょっとしたいくつかの不運に見舞われていた。朝、丁度 8 時 50 分に、見張りが一隻の船が我々に向かって来ると合図を送った。高級船員たちは船橋に急ぎ、乗客はデッキに集合する。望遠鏡ないしはオペラグラスで各々が、真っ直ぐに我々に向かって来る船について詳しいことを知ろうと努める。こうして一時間が経過し、我々はその間にかなり近づいていたので、その未確認船が命じた信号を知ることが出来た。「直ちに停船せよ！」我々の船は停止する。二度目の信号が続く。「貴艦の識別旗を見せよ！」。「フロリダ」の識別旗はアルファベットの I.G.T.H. で、すぐさま掲げられて風に揺れた。我々と未確認船との距離はその間に、はっきりと大砲の砲口を認識出来るほどますます小さくなる。疑いもなく我々が相手しているのは補助巡洋艦だが、どこの国のだろう？心配なしではいられずに誰もがこの疑問を抱いた。高級船員の間でさえ考えは一緒だった。何人かはそれをイギリス人と思い、ドイツ人とする者もいた。その間に更に信号が取り交わされた。敵は信号を送ってきた。「これからボートを貴艦へ差し向ける！」

電信による通信はもちろん乗客の間にありありと不安を呼び起こしていた。婦人たちは甚だしく動揺し、男性たちは少なくとも表面的には沈着さを維持しようと努める。まもなく我々は詳細を知ることになる。というのも高級船員 3 人と約 15 人の乗組員を乗せたボートが艦を離れたからだ。

つづく

火曜日向け

血入りソーセージ	35 銭	ガーリックソーセージ	35 銭
モルタデッラ	40 銭	ウィンナーソーセージ 2 本	7 銭

チンタオの英雄たち

（「彼らは戦闘を予期して 1,500 基の墓を掘って用意していたが、^{たお}斃れた英雄たちが大号令の合図を墓の中で待ちわびているのはその内の 220 基にのみである」

『日刊展望』の戦況報告）

まだ敵が上陸する前に、
君たちは自らの手で、
1,500 基の墓を掘る。

間違いなく激しい
戦闘に果てて目を閉じる日に、
君たちの肉体が葬られることになる。

君たちの内の誰一人欠けていないことを。
最後の戦闘の前線で
君たちはしかし死を覚悟していた。

チンタオの大地に
何列も長く、広く、深く掘るのは、
君たちの肉体の死の叫びだ。

だが轟々たる嵐の中で一人の男が
その男が君たちを
まさしく導いて行った。

驚嘆して脇を向きたまえ
僅か… 220名を
彼はその犠牲として……

敵よ、チンタオの開いたままの墓を見よ、
もし君らが勇敢ならば！
永遠の眼を覗き見よ！

お前たち愚鈍な馬鹿者たちは、ドイツ人の忠実を
打ち負かせる、とでも思い込んでいるのか？
決してそんなことは君らには適わぬことだ！

このチンタオの開いたままの墓で
我々は我らが神に誓う：
我がドイツよ、死に至るまで忠実たり！

クルト・ツィースヴィッツ



自転車伝令兵シュトランペルは底知れぬほど深いロシア領ポーランドの街道で鉄の部品の助けを借りる術をどんなに心得ていることか。



豚のはなし



収容所に新たに豚が来た
どんな種類かという、見事な黒豚
豚舎の中で食い意地いっぱい
その愛すべき剛毛の家畜は餌を食らっている。
どれほどの量かといえば
毎日豚の世話係りは
大きく、重いカブを
厨房から豚たちのために運んでくる。
なぜなら豚をまるまる太って
元気で健康にしなければならぬからだ
それからやがて屠殺にかかって
我々のために見事な食卓の動物となるか





あるいは入念に施されて
少しずつソーセージになる
その後に売るために
ソーセージ部屋に吊るされる。
最近も屠殺台に豚が一匹運ばれた
そこで私は一人密かに考えた
一体その動物は行こうと思っているのかと。
というのも豚の足に
紐を括りつけて
棒を手にして豚を
角を曲がらせようとしていた。
けれどもその動物には分かっていた
この道が危険に満ちていることを

動物は激しくもがいて
この事から逃れようとする
しかし無益なことだ、というのも笑うのは
ただ優位にあるものだけだから。

沢山の手が動き
まもなく豚はテーブルの上に横たわる
そして早くも引きずってこられる、一匹、二匹、三匹と
熱い湯が運ばれる。

頭を一発殴られて
まだ生きている体の内部に刃物が入れられ
なお痛ましい叫びが響く
やがて死がやって来る